

2025年
令和7年 10月7日(火)

第18回

堂崎 観音寺

午後6時30分より(8時頃終演予定)

於：観音寺境内(雨天時は本堂)

愛媛県宇和島市石応^{こくほ}1351(Tel:0895-28-0051)

国道56号線を松山方面より宇和島道路に入り
板島橋トネルを抜け、石応別当降り口にて降りる。
信号を右折、分かれ道を左に進み、約5キロ。
石応郵便局の先、右に入る。駐車場へ。

料金:1,000円 ※お席に限りがありますので、お早めにお申し込み下さい。

【予定演目】

- ◆「祇園精舎」平家物語冒頭句
- ◆「耳なし芳一」～小泉八雲『怪談』より～
池田寿 作詞 / 二代柴田旭堂 作曲
連続テレビ小説「ばけばけ」放送にちなみ
お馴染みの怪談の名作を演奏します！
- ◆平家物語外伝「堂崎観音堂悲話」～宇和海落武者伝説～
川村素子 作詞 / 川村旭芳 作曲(平成18年10月初演)



【演奏者プロフィール】

ちくぜんび わ かむむら きよくほう
筑前琵琶奏者 川村 旭芳

神戸市出身在住。
八歳より母の勧めで、筑前琵琶日本旭会総師範 故二代柴田旭堂に師事。
古典曲を継承しつつ新作の創作にも取り組み、
阪神・淡路大震災の追悼曲をはじめ、母川村素子の作詞による作品も発表。
「堂崎観音堂悲話～宇和海落武者伝説～」は、母娘合作の代表作の一つ。
1998年～2010年、和楽器オーケストラ 邦楽合奏団「鼎」(KANAE)に所属。
現代曲奏者として、関西の楽団、邦楽社中、音楽大学などの国内外における
公演に多数出演。
2011年、CD『川村旭芳作品集Ⅰ～母娘合作集～』(「堂崎観音堂悲話」収録)
および『川村旭芳 筑前琵琶のしらべ～源平一ノ谷合戦～』2枚同時発表。
琵琶・胡弓・箏・尺八の演奏家四人で結成された和楽器ユニット「おとぎ」の
代表を務め、内子座、八千代座ほか全国の芝居小屋での公演も開催。
門人会「筑前琵琶川村旭芳会」主宰。NHK-FM「邦楽のひととき」他出演。

【その他、四国・愛媛県にちなむ自作曲】

- ◆「空海讃歌」～入唐千二百年記念～
- ◆「千歳余り二百歳」～四国へんろ開創千二百年記念～
- ◆内子町 清盛寺に伝わる平家の落人伝説より「八房の梅～登貴姫哀歌～」

耳をすませば今もなお梢をわたる風の音に和して聞こゆる誦経の声

当地に伝わる平家の落武者伝説

一ノ谷・壇ノ浦・宇和島を結ぶ壮大な歴史ドラマを哀切な琵琶の音と語りでお聴き頂きます

お問合せ・ご予約

観音寺(山崎) Tel:0895-28-0051 / 携帯:090-3461-7307

題字: 信田 春塘

祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響あり

娑羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらはす

おごれる人も久しからず 唯春の夜の夢のごとし

たけき者も遂にはほろびぬ 偏に風の前の塵に同じ

◆「耳なし芳一」 池田寿 作詞 / 二代柴田旭堂 作曲

耳なし芳一の物語は、赤間神宮(山口県下関市)の前身にあたる阿弥陀寺に伝わる昔話で、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)の著書『怪談』(KWAIDAN)で広く知られています。

赤間神宮には、壇ノ浦の戦いで入水した安徳天皇が祀られ、境内には平家一門を祀る塚もあります。江戸時代までは安徳天皇御影堂(みえいどう)といい、仏式で祀られていましたが、明治の神仏分離により阿弥陀寺は廃され、神社となって現在に至ります。

琵琶曲「耳なし芳一」は、川村旭芳の師匠、二代柴田旭堂氏の代表作で、昭和34年にラジオ関西からの依頼を受け、ラジオ放送のために作られた作品です。

かつてCBS・ソニー社から発売された3枚組LPレコード『筑前琵琶 柴田旭堂の世界』に収録。

【あらすじ】

赤間ヶ関の阿弥陀寺に住む盲目の芳一は、琵琶の名手でした。

ある夏の夜、留守居の芳一の前に一人の武士が現れて、あるじの御前で平家物語の弾き語りをするようにと命じます。芳一は屋敷とおぼしき所へ連れて行かれ、大勢の貴人の前で「壇ノ浦」を演奏します。そして、幼帝が入水する場面に差し掛かると、すすり泣きの声が聞こえてくるのでした。芳一は、その日から六日間、毎晩ひそかに此处へ来て平家物語を演奏するようにと命ぜられ、そっと寺に戻りますが、芳一の不在はすぐに和尚の知るところとなります。和尚が訳をたずねても芳一は答えようとせず、その様子を案じた和尚が、次の晩、小僧たちに後をつけさせると、芳一は安徳天皇の墓の前で一心不乱に琵琶を弾いていたのでした。平家の亡霊に取り憑かれていると知った和尚は、その晩も法事で留守にするため、芳一の身体中に経文を書き、何があっても身動き一つせぬように言い聞かせました。

やがて亡霊が芳一を迎えにやって来ますが、経文に護られた芳一の姿は見え、使いを果たした証しにと、宙に浮いている二つの耳をもぎ取って去ってゆきました。明け方、寺に戻った和尚は血潮に染まった芳一の姿に愕然とし、耳にだけ経文を書き漏らしたことを詫び、ただちに手当を受けさせます。

平家の怨みも鎮まり、傷が癒えた芳一の琵琶はますます評判になり、いつしか「耳なし芳一」と呼ばれるようになりました。

どうざきかんのんどうひ わ うわかいおちむしゃでんせつ

◆「堂崎観音堂悲話」～宇和海落武者伝説～ 川村素子 作詞 / 川村旭芳 作曲

耳をすませば今もなお 岩場に寄する波の音

梢を渡る風の音に 和して聞こゆる誦経の声…

四国は潮の流れによるのでしょう、平家の落人伝説が各地に伝わっています。その一つ、ご当地 観音寺に伝わる哀れな物語を、山崎忠司住職より依頼を受けて創作した作品です。節を付けて歌う部分と、節を付けずに語る部分を交互に配した、一般的な琵琶曲にはない浪曲のような手法を取り入れています。

平成18年(2006年)10月「第二回 琵琶の夕べ」にて初演。以来15年以上に亘って毎秋この地で演奏していますので、お馴染みの曲として聴いて下さる方もいらっしゃるでしょう。

一ノ谷、壇ノ浦、宇和島を結ぶ壮大な歴史ドラマ。八百余年の時を経て、哀切な琵琶の音に乗ってよみがえります。(CD『川村旭芳作品集Ⅰ』～母娘合作集～に収録)